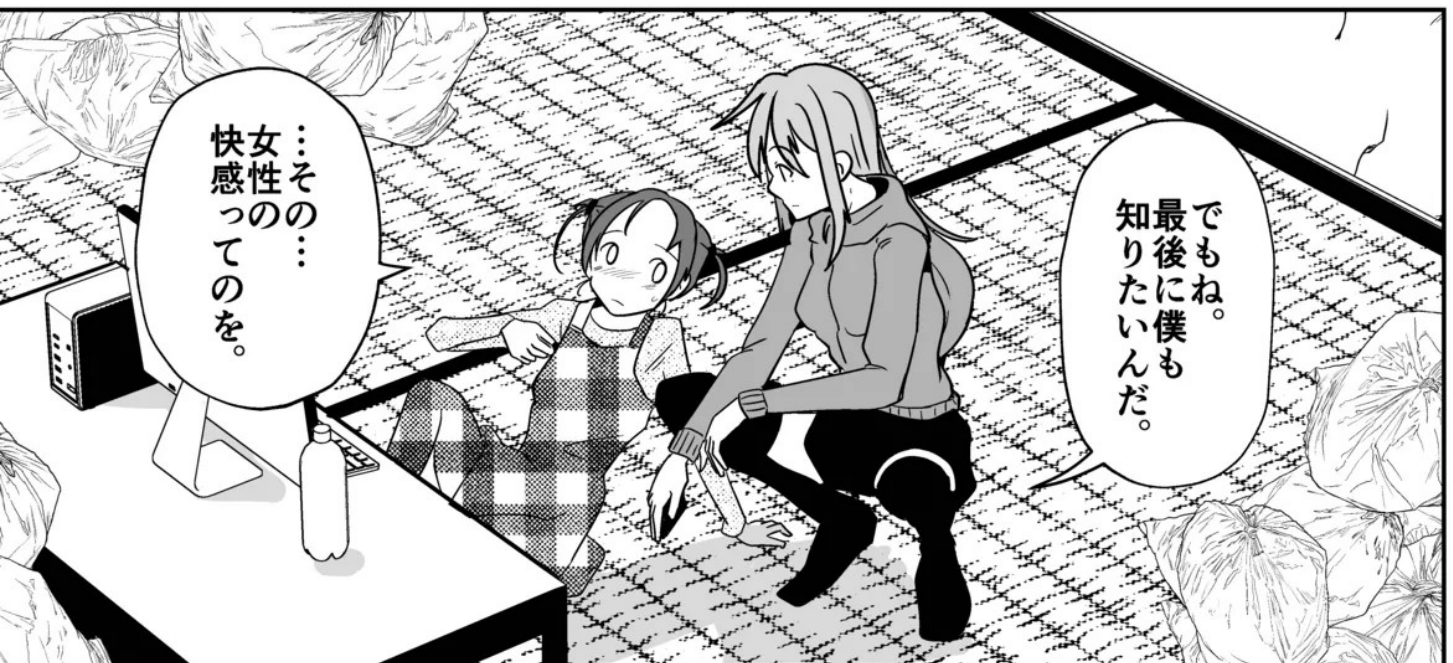
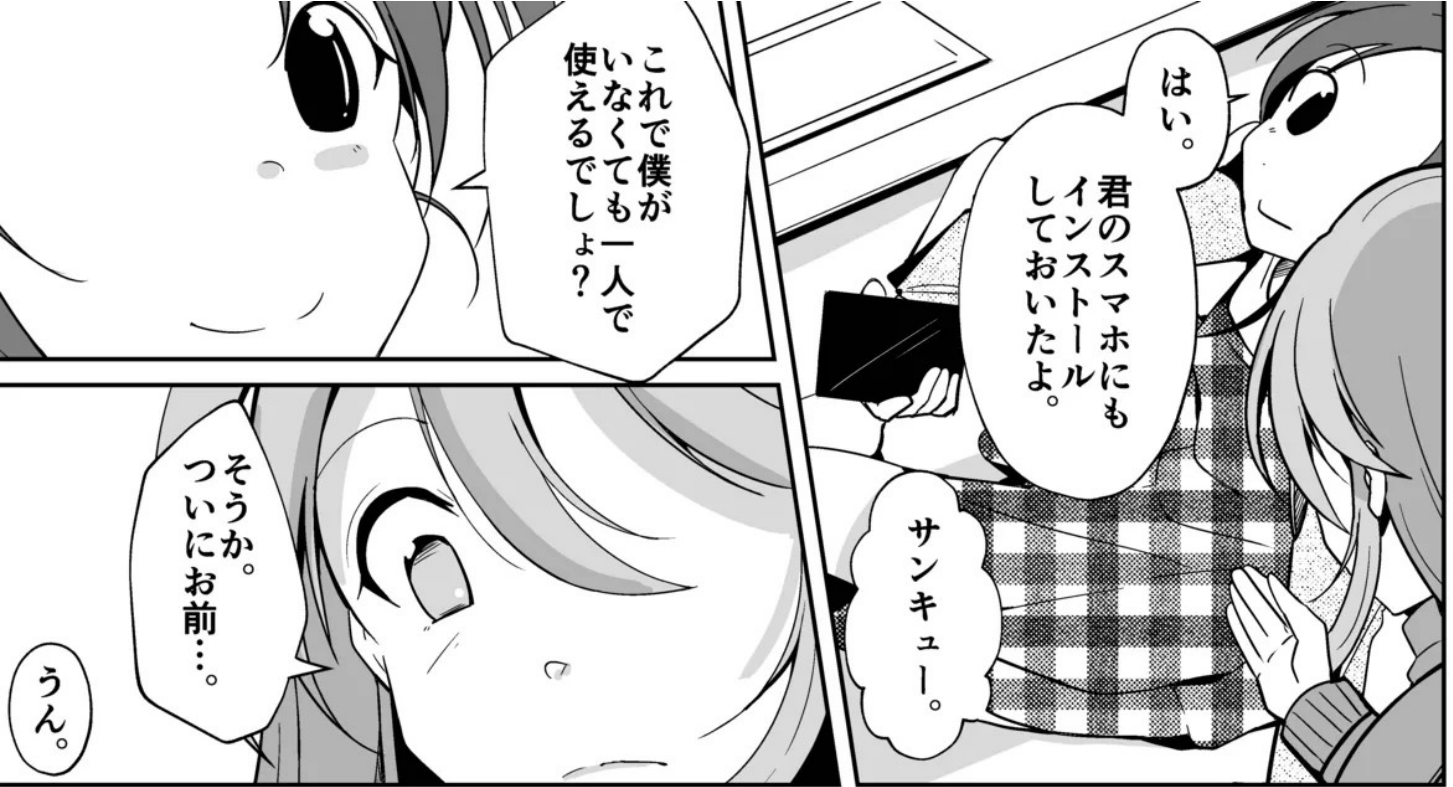
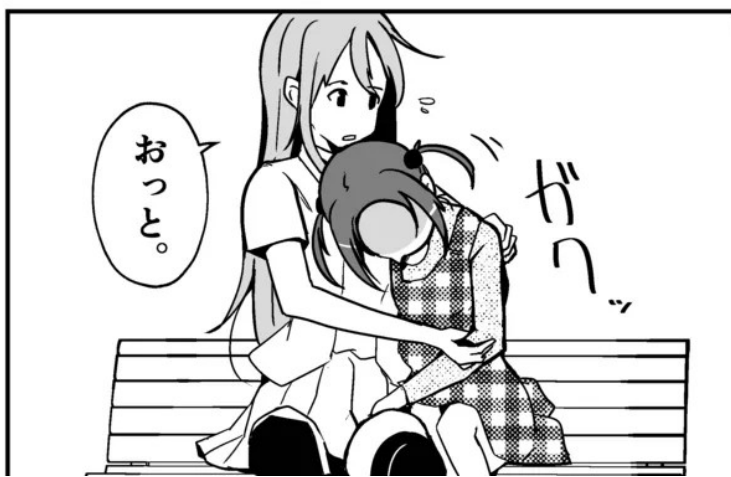
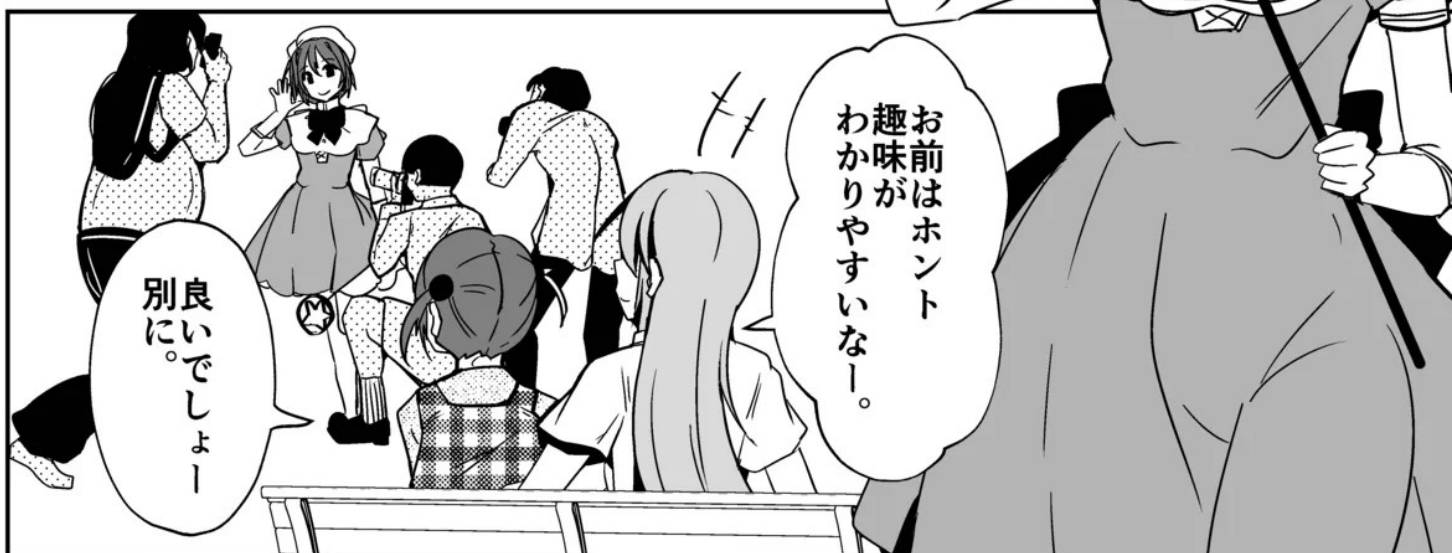
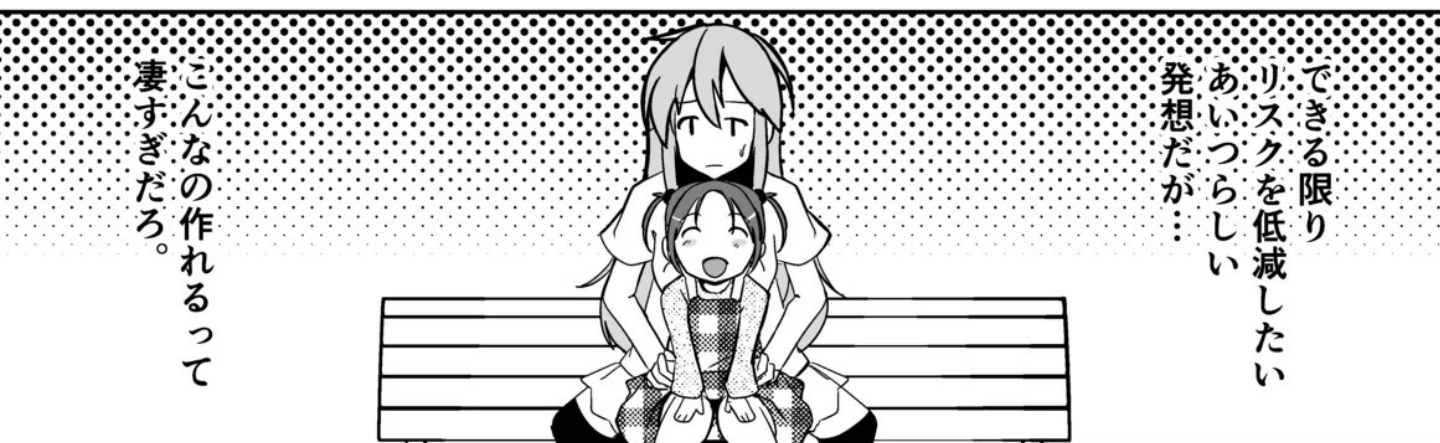










僕がこんなに
他人から
注目されるなんて。

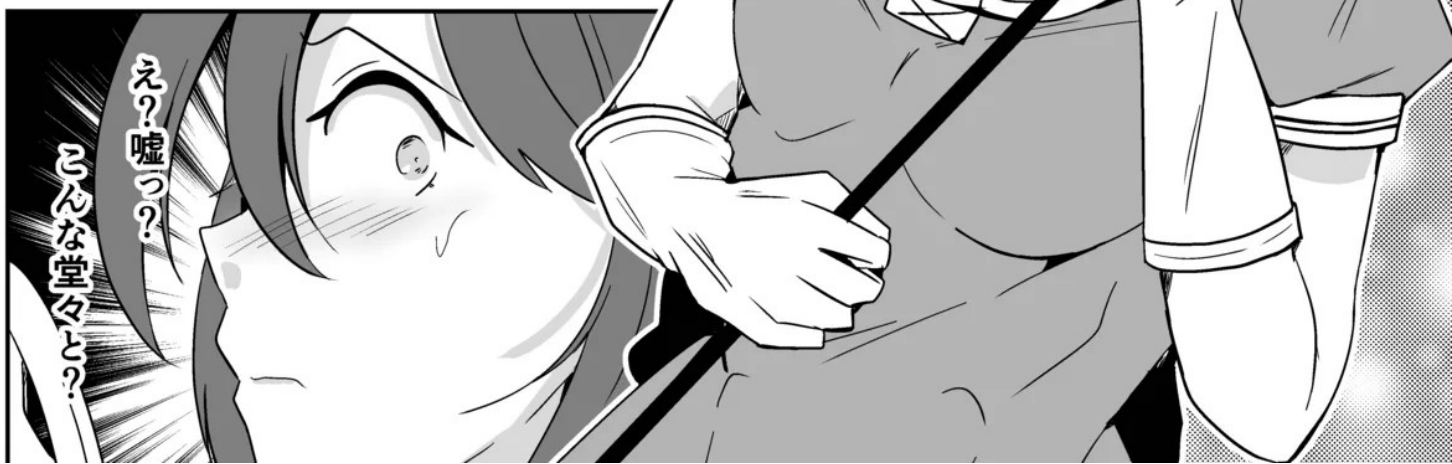


羨望・感激・夢中

ああ。
なんて
素晴らしい光景。
これらの感情が
僕に対して
向けられているんだ…。



これが強者が
見る世界なんだね…。



え？嘘っ？
こんな堂々と？





咲ちゃん
もうすこし
こう、股を...

そうそう。
それでこう、裾を

は、はいっ!
こうですか?

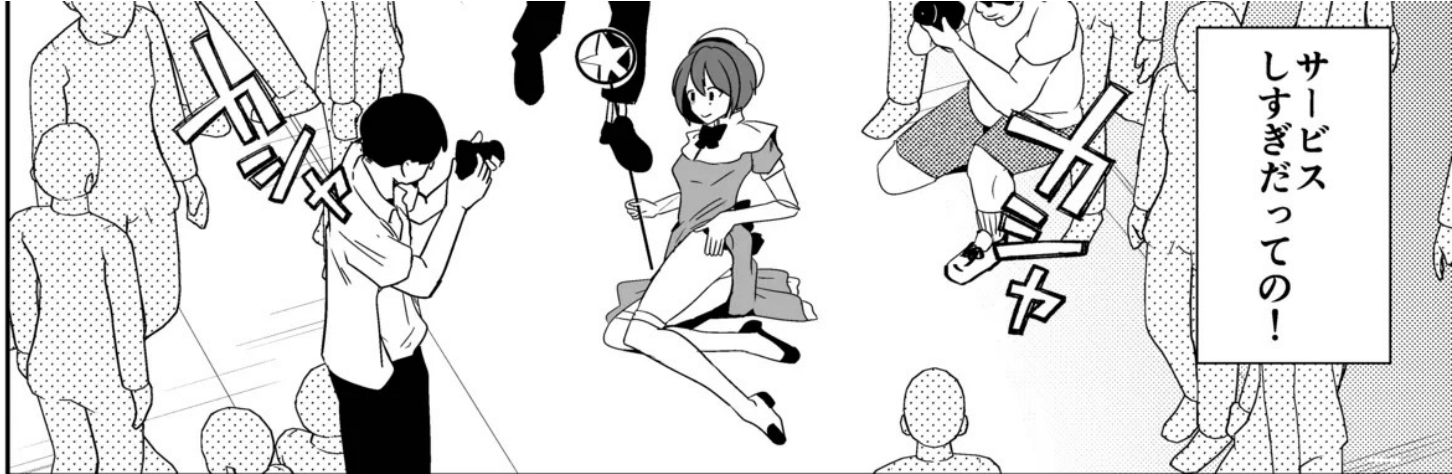
おおー。

ああ...
素晴らしい...
何をしても
肯定されるなんて!

夢のような
環境だあ...

ちよつとバカ!
何やってんのよ!

でも、
ちよつとバカなめ。



サービス
しすぎだつての！



一緒に撮っても
良いでござるか？

はい…良いですよ…
はい…

断れるわけ
無いじゃん！
僕、お願い
されてるのに…

うらやま！
俺も！
バカ！



そんな事
してたら…っ

ひゃっ！



こんな行為をする
事自体初めてだし。

しかも、異性の体で。

でも、ここで
勇気出さなきゃ。

やらなきゃ。

何のために
この子の身体を
乗っ取ったのが...

嫌なら
そう言えよ。
良いじゃん。

言わないって事は

本当は
したいんでしょう？

な、誰だこの人、
急に...

ハ？...

ええええええ!!



手伝ってやるよ。
相棒。

誰が奈々ちゃんを
監視するんだよ。

この子の魂も
消してないし！

しど
しど

え？
あ、すまん。

でも、心強い。

みんなも
見たいよねえ。

え？

ホント
君ってやつは…

うおー！





特別にこの子のおまんこを使わせてあげる。

お、俺なんかでいいんっすか。

は、初めてなんっすけど！

いいんじゃない？

この子も初めてだし。

ね、良いわよね？

う、うん。

「うん」じゃねーよ！
やめろ！
今すぐやめろ！

…って
脱いでるし。



頼むから、
やめてよ…



ふう。
君が性格悪くて
良かったよ。

心置きなく
汚せる。

あああっ！



じゃあ、咲様。
お言葉に甘えて。

やめて…

うん、きて。

下腹部に
異物感が...

す...す...す...

これが
挿入されてる
感覚なんだ...

びう

あぁ

びん

嘘でしょ？

本当に...

痛い...
でも、なんだろう...

あっ

パン

パン

こんなヤツに
私の初めてが...

パン

んっ

よくわからないけど
興奮するっ！

っ

っ

んっ



いいっ♡

ふあああつ！

気持ち
いいよ♡

おはよう

クク。

えらく乱れてる
じゃないか。
お前らしくない。

ガッ

がッ

だってえ、

声出した方が
より高まって
くるんだもん…

僕じゃないから
何をしてても
恥ずかしくないし！

そう。
自分の身体じゃないんだ。

可愛い女の子の
身体だから…
自信が持てる

等身大で今の状況を
楽しめるんだ♡







どうだったよ？

うん。
すごかったよ。
予想以上。



癖になるのも
理解できるよ。

なら、このまま
過ごすか？

うーん。
それはないかな。



確かに
女性の快楽は
凄いいし

承認欲求も
満たされる。

でもね。



いずれは
この悦びにも
慣れて
しまおうし…

体が違っても
僕は僕だ。

僕は僕が
嫌いだから。

…そうか。



じゃあ
いいかな。

僕からの
最後のお願い

聞いて
くれるかい？



あの人で
いいんだな？

うん。

わかってると思うが
おそらくお前の
自我はなくなる。

つまり
お前がお前だった
記憶を
失う事になるんだ。

……本当に
いいんだな？

うん。
そうじゃなきゃ困る。

僕は僕じゃない
女の子として

楽しく穏やかで
幸せな人生を
送りたい。
ただ
それだけなんだ……。



はあ？
お前正気か？

胎児に魂を
移すだと？
そんな事したら
お前自身が！

うん。



僕は僕じゃない
誰かとして
もう一度人生を
やり直したい。

美少女に
生まれる事が
約束された遺伝子
良好で裕福な
家庭環境

当たり確定の
親ガチャの娘
として、ね。

俺とは
違う方向で相当
拗らせてるなお前。

ははっ…



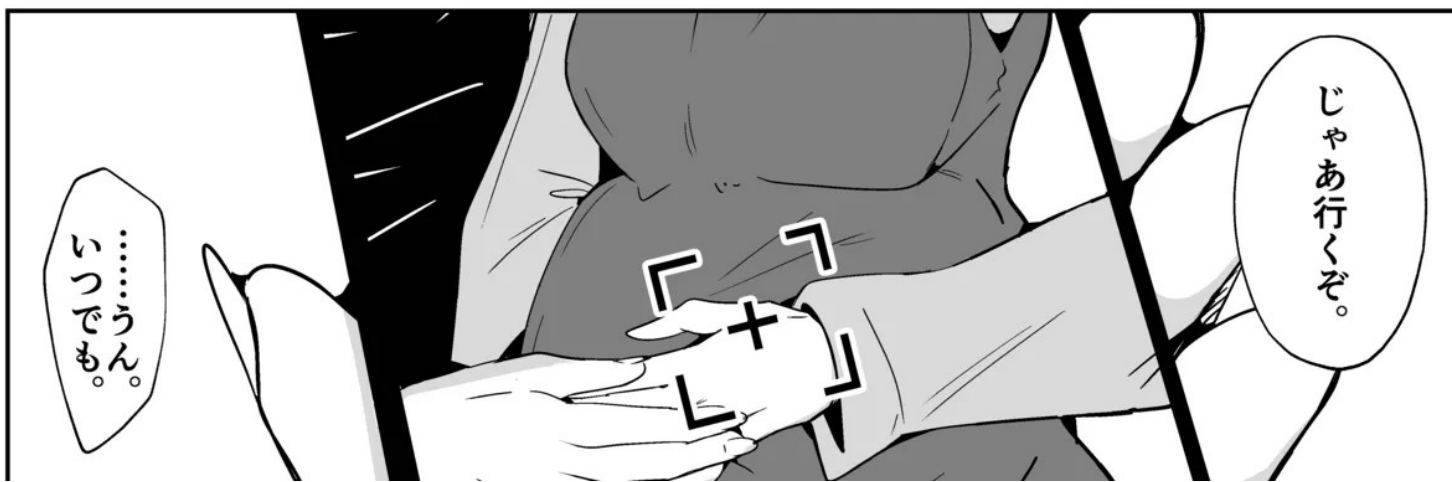
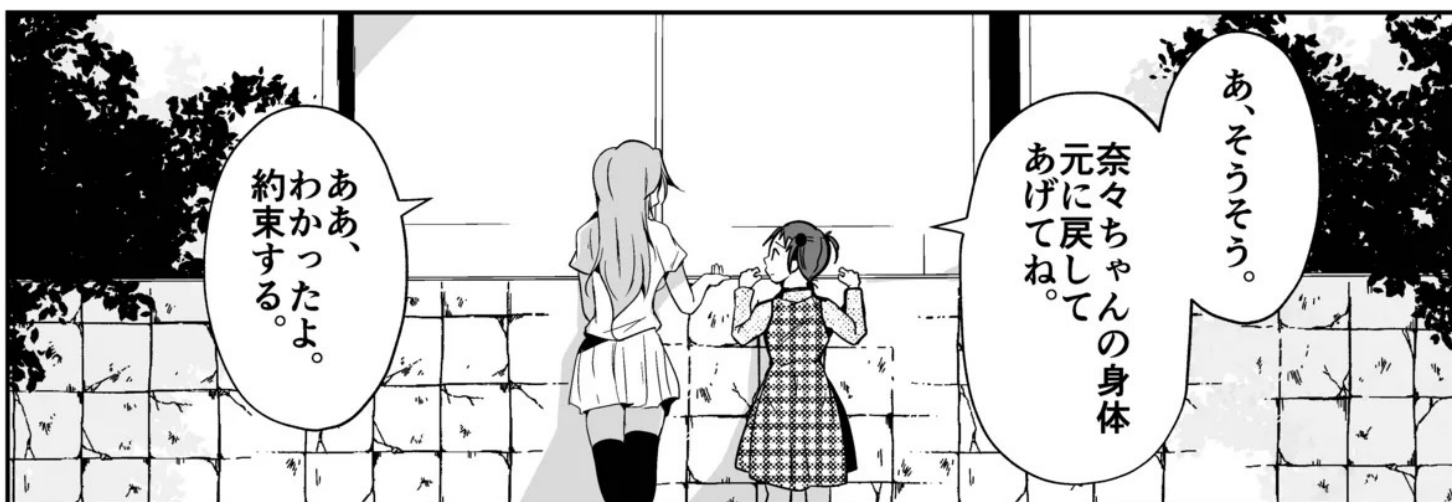
初めて聞いた時は
驚いたな。

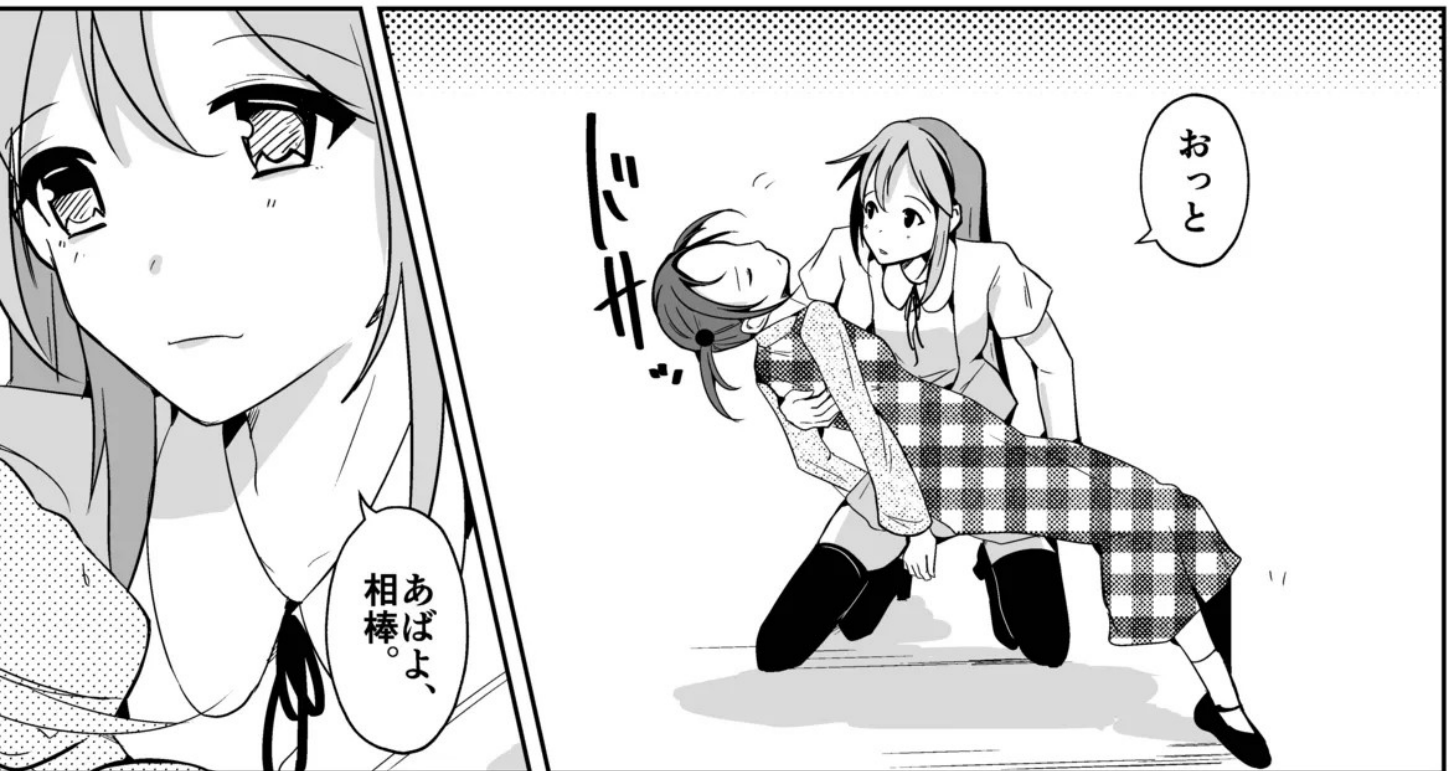
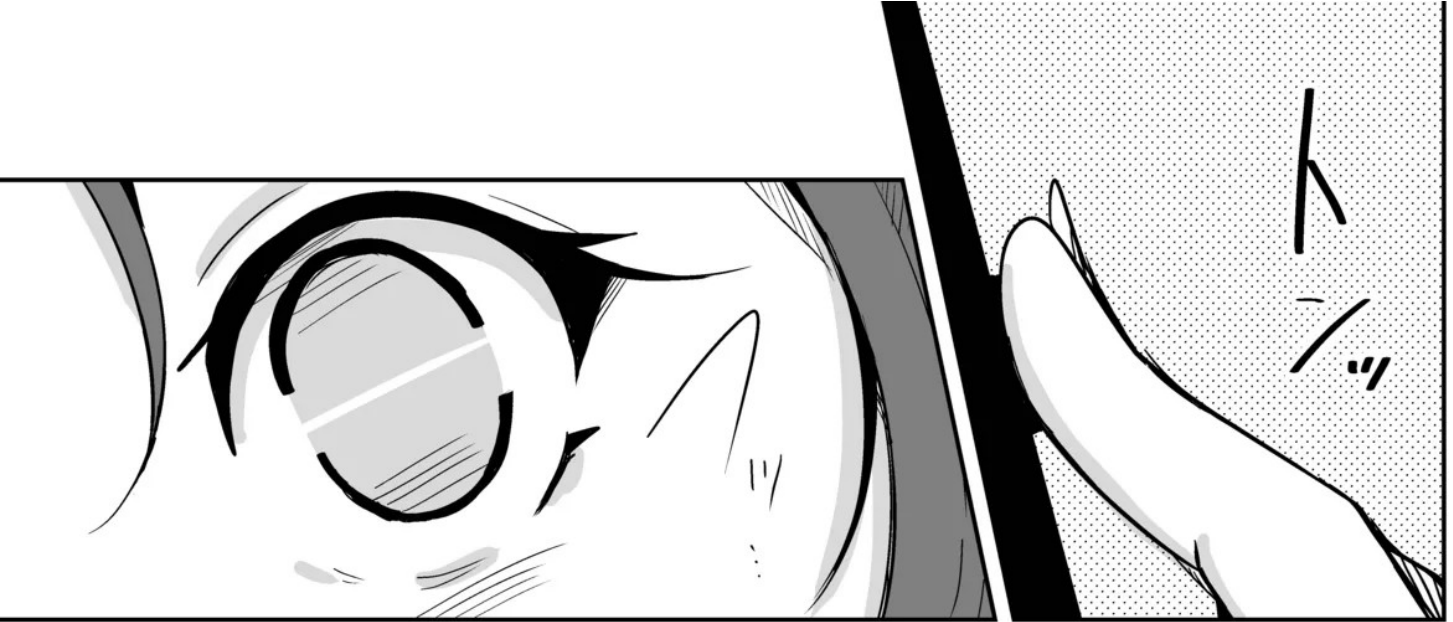
だがまあ、
楽しい時間では
あったが。

うん。

僕も…最期に
楽しい時間を
過ごせた。

だから…







俺はまず
セレブの身体を手に入れ
生活水準を向上させた。

そして贅沢の
限りを尽くした。



だが、女性の快楽を
超えるものは
この世に存在しなかった。

だから俺は
あらゆる女の身体を
楽しんだ。

これこそが
最高の快楽であると
悟ったからだ。

この能力を
俺だけが
独占しているのかと
思うと
まさに自分が
この世の王に
なった気分だった。

輝かしい人生を
歩む人間の
美味しい部分だけを
ひたすら
つまみ食いする人生。

手に入らない。
ものなんてない。
欲しいなら
その人物ごと
手に入れば
良いのだからな。

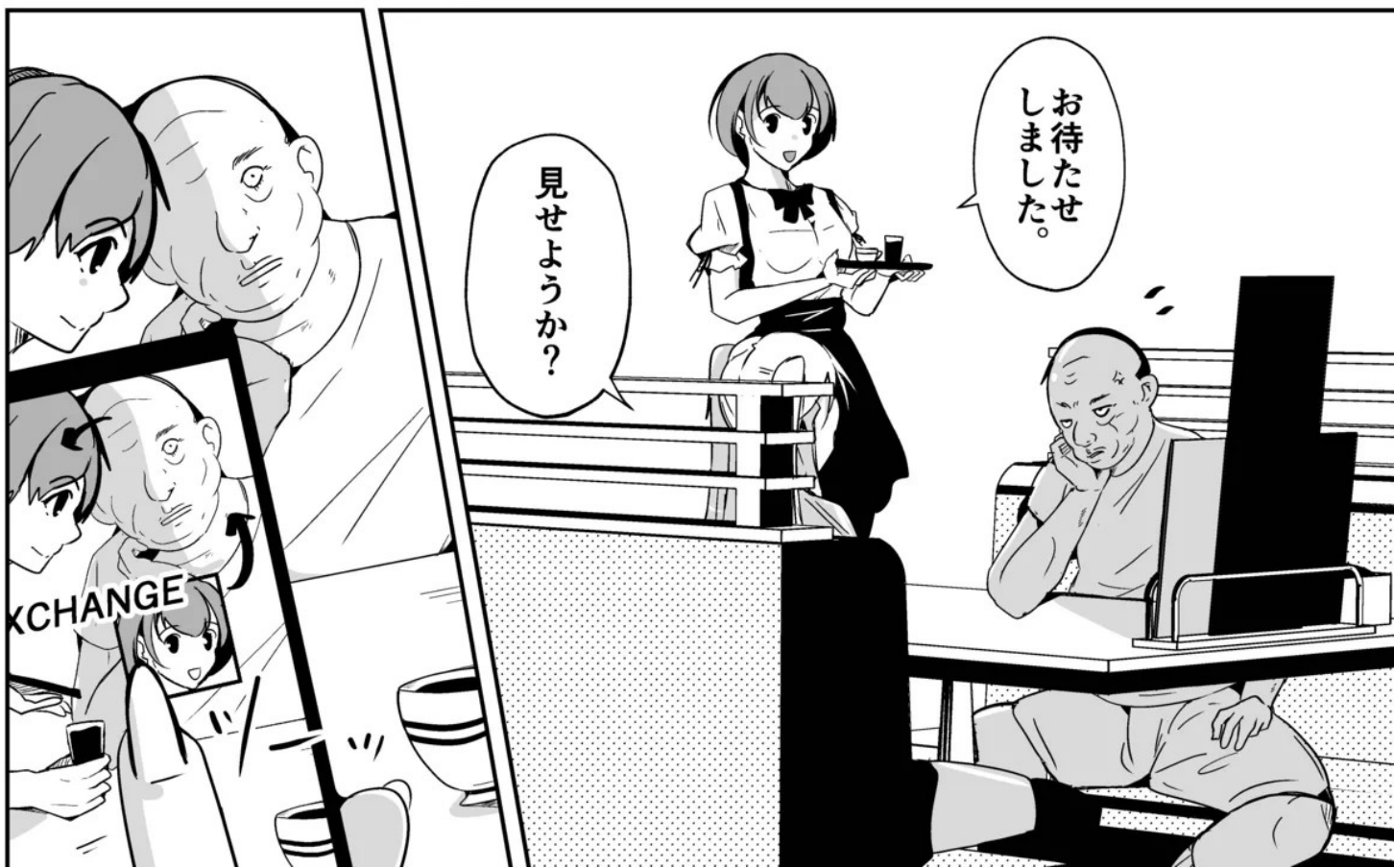


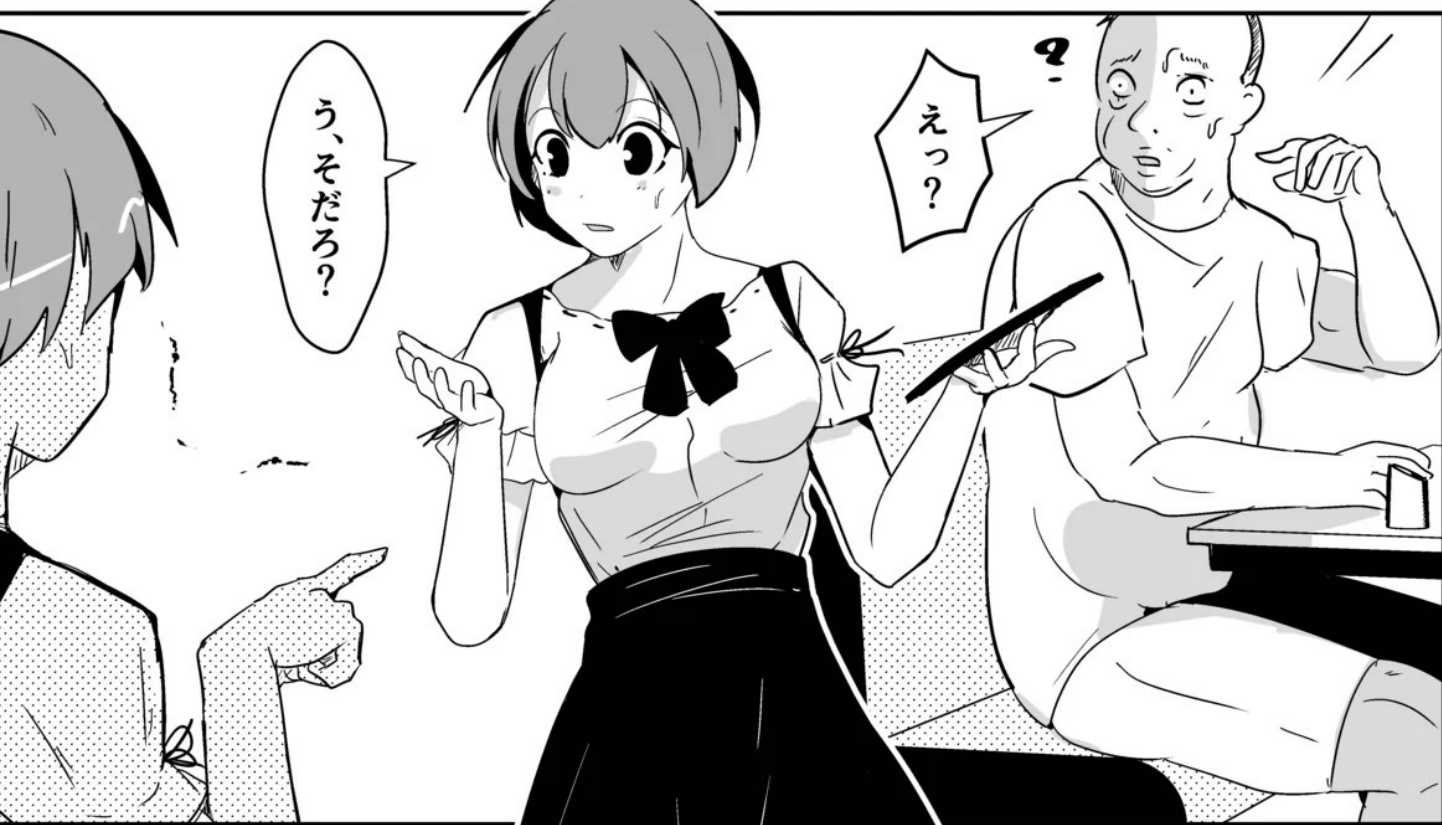
だが
不思議なものだ。

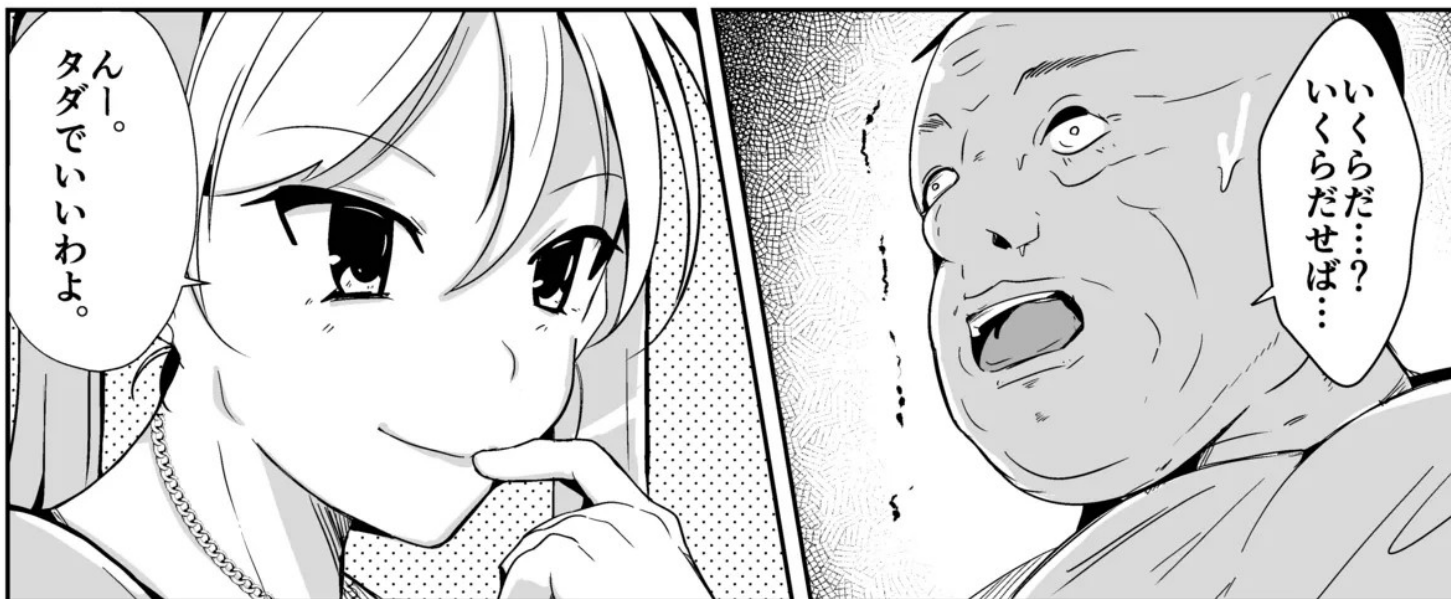
自分が
満たされると
独り占めしたいと
言う気持ち
が薄ら
いでいった。

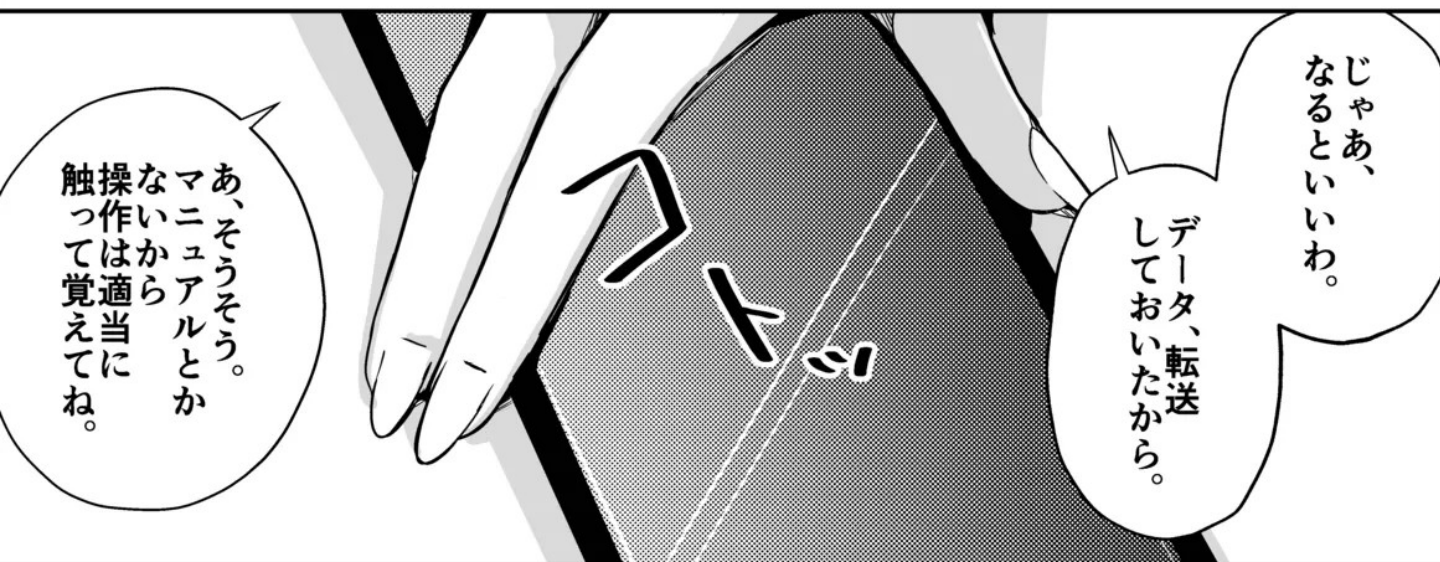
そして、
かつての
俺のような人間に
悦びを分け与えたいと
思うようになった。













NEXT..... 魂管理アプリ